

◇ 2月の天文暦 ◇

日時	記	事
4 16	立春 (太陽黄経 315°)	
6 1	望	
6 7	月 最近	
6 12	水星 外合	
12 18	下弦	
15 10	ベスタ 留	
19 12	雨水 (太陽黄経 330°)	
20 6	月 最遠	
20 20	朔	
28 19	上弦	

星雲めぐり (1)

18世紀後半から19世紀一銀河がまだ熊の毛皮を披げたような、ハーシェルの恒星分布で考えられていた頃一星雲のカタログも、望遠鏡で星雲状に光って見える天体は、銀河系内であっても同じに扱われていた。

今日、大望遠鏡による写真の蓄積により、洗練された多くの星雲カタログあるいは写真集にめぐまれるようになった。そのひとつ、“サンデー著、ハブル星雲写真集” (石田氏、天文月報 56, 19, 1963 参照) から、いくつかひろって話題にしてみよう。

写真は対をなした。8字形の連星雲、NGC 750, 751 (赤経 1<sup>h</sup>54<sup>m</sup>6, 赤緯 +32°58′) で、むかって左が北、上が西、この写真の明るい部分が、ほぼ 0.8×0.3 である。測光による表面輝度分布は、廻転対称かつ中核から周辺部への変化はスムーズで、スペクトルは吸収線のみ

示し、輝線はない。明らかに楕円型星雲のコンビ (EO+EO) である。両星雲とも、見かけの写真等級  $m_B=13^m$ 、色指数  $C_{B-V}=1.0$ 、視線速度 5130 km/sec で、両星雲間は光った橋でつながり、この写真では見えないが、ツイッキーによれば、北西方向に淡い光脈が伸びているという。

ハブルの分類型 SO, S, SB, Irr, の 2, 3 の組合せ、あるいは前の四つの型と E との組合せの二重、三重の連星雲は種々みつかっていて、相互に潮汐突起とも考えられる光のかけ橋が、いろいろ写真で知られているが、この写真のような楕円型同志のアベックは、現在わかっている範囲では割合少ないようである。

どのようにしてこのような系が出来、相互の影響や、安定の問題などこれから解明され、星雲全般の性質もより詳しくなっていくものと思われる。



東京における日出入および南中 (中央標準時)

日	夜明		日出		方位	南中		高度	日入		日暮	
	時	分	時	分		時	分		時	分	時	分
1	6	9	6	42	-21.1	11	55	35.9	17	8	17	41
10	6	1	6	34	-17.3	11	55	39.8	17	17	17	50
20	5	51	6	23	-13.1	11	55	43.2	17	27	18	0
28	5	42	6	13	-9.6	11	54	45.9	17	35	18	6

各地の日出入補正值 (東京の値に加える)

(左側は日出、右側は日入に対する値)

分	分	分	分	分	分	分		
鹿児島	+31	+43	鳥取	+22	+22	仙台	0	-9
福岡	+34	+41	大阪	+16	+19	青森	+5	-12
広島	+27	+31	名古屋	+11	+12	札幌	+6	-19
高知	+22	+28	新潟	+6	-1	根室	-10	-36

◇ 2月の日月惑星運行図 ◇

